

校長室より

二松学舎大学附属高等学校
校長 鶴飼敦之

「二松から飛翔へ」

図書館蔵書より

6月、教育実習生が無事に3週間の実習を終え、大学へ戻っていきました。私の手許には実習中に皆さんと触れ合えた感動などが書かれたお礼の手紙が届いています。実習前に大学で学んだ理論が実際の学校現場ではどのように生かされているのかを肌で感じてくれたことと思います。大学では学びをさらに深めてくれることを期待しています。最近、教員のなり手が少なくなっているとの報道が目立ちます。ぜひ、教職を目指して頑張ってくれることを祈るばかりです。

さて、実習生が控室としていた図書室に何度か足を運んだついでに書架を眺めていたところ、懐かしいタイトルが目飛び込んできました。

『木に学べ』という本です。ページをパラパラとめくると以前に読んだ記憶があります。寺社建築を専門とする宮大工を紹介した内容です。小学生のなりたい職業ランキングに「大工」は、ほぼ毎年登場してきます。私も憧れた職業の一つで、再び手に取って読んでみました。モノづくり NIPPON も捨てたもんじゃありませんね。

著者は最後の宮大工と言われた西岡常一氏。幼少の頃から宮大工だった祖父に鍛えられ1930年台から法隆寺の大修理や薬師寺の再建にも携わりました。紹介する書籍は1991年の発行で、当時83歳ですので、すでに鬼籍に入られています。私が中学3年の修学旅行で薬師寺を訪ねた際、寺には『東塔』しかなく、『西塔』が再建されるという説明を受けました。その後、1981年に再建されましたが、それ以来、残念ながら薬師寺を訪ねていません。

宮大工は民家を立てると穢れるとして、自宅も他人に建ててもらったという宮大工に対するプライドの高い西岡氏ですが、その中で印象に残る言葉を紹介しましょう。

「堂塔の木組は寸法で組まず、木の癖で組め」というフレーズ。木はそれぞれの条件で育っている。その木が向いている方向に合わせて建物のどの面にその木を使うかを決める。木には癖がある。風の強い場所で育った木はそれにあった成長をする。そうした木の癖、すなわち「木の心」をよんで堂塔を建築をすることによって法隆寺は1,300年経った今でも立派に立っていると説いています。今日の間人間関係にも当てはまりそうです。

また、「木を知るには、土を知れ」とも語っています。残念ながら現在、日本国内には寺社建築に耐えうるヒノキがないそうです。そこで台湾のヒノキを活用することになるのですが、台湾のヒノキは、粘板岩という粘土を押し固めたような土地に生えており、その粘板岩の間に水がしみこみ、その水を求めてヒノキの根が岩の間に入っていきそうです。甘やかして欲しいものがすぐに手に入ったんじゃないものにはならない。人間と同じと語っています。

西岡氏には男のお子さんが二人いたそうですが、後は継がなかったとのこと。あまりにも教えが厳しいため、別の道を選んだといいいます。後を継いだのが、小川光夫氏ですが、中学校の修学旅行で奈良を訪れ、宮大工の仕事に惚れて弟子入りしたとか。この小川氏が後に設立したのが、寺社建築専門の建設会社である『鶴（いかるが）工舎』。西岡氏の教えを受け継ぎ、伝統的な工法で寺社を立てる「工（たくみ）」の集団。

創業者三島中洲師の精神を継承する学徒の集団である二松学舎。同じ『舎』を表現しているのもいいですね。

～西岡氏のあとがきより～「堂塔伽藍を造営するには、様式や形式に先だって造営の意義というものがあまらな。英邁限りない聖徳太子が仏法の慈悲をもって国を治めようとなさったんやと思います。仏法の慈悲ゆうたら、母が子を思う心だっせ」。(右写真：薬師寺)

